

〔古今和歌集十八〕田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮の

うちに侍りける人に遣はしける、

在原行平朝臣

わくらはに問ふ人あらばすまの浦に藻鹽垂つ、わぶと答へよ

〔拾遺和歌集十七〕天曆御屏風に

よみ人しらす

もしほやく煙になる、すまの蟹は秋たつ霧もわかずや有らん

〔拾遺抄註〕

たごの浦にかすみのふかくみゆる哉もしほの煙たちやそふらん

モシホトハ藻ニテ鹽ヲバ焼ナリ、故ニモシホトハ云ナリト書タルモノハベレド、イカハトオ
ボユ、モシホタルトハ、ウシホヲ藻ニシメテ、コレヲタレテヤクナリ、鹽木トテ木ニテヤクナリ、
ソレヲモシホヤクトハ申ナリ、

〔屠龍工隨筆〕もしほといふは、上古鹽をたる、に、今のごとく砂にたる、事を知らずして、海の
藻を集て、夫に鹽をたれてやきたるといへど、何とやらんおぼつかなし、よしそれはともあれ、
もしほたる、もしほやく、もしほの烟など、いへるも、もしほくむといはざるは、おもふに海の
水をくんで、鹽にやかんとするより、以後の詞なるべし、

〔謠曲〕忠度

ワキ あまならば浦にぞ住べきに、山ある方に通はんをば、山人とこそいふべけれ、シテそも海士
人の汲鹽をば、やがて其ま、置候べきか、ワキ 實にくこれとはりなり、もしほたくなるゆ
ふけむり、シテたえまを遅しと鹽木とる、ワキ 道こそかはれ里ばなれの、シテ人音まれにすまの
浦、ワキ ちかき後の山里に、シテ柴といふ物の候へば、地 柴といふ物の候へば、鹽木のためにかよ
ひくる、○下 略